

日本の脊髄麻酔の歴史

——とくにヤコビー線に関連して——

松 木 明 知

日本において、脊髄麻酔施行時、穿刺部位の決定に利用される所謂“ヤコビー線”について、ヨーロッパ諸国はもちろん、アメリカ、ソビエト、中共でも全くその存在は知られていない。同様な線はフランス、アメリカでは“ツィーフェーの線”として一部に知られている。

では一体どうして、欧米で全く知られていない“ヤコビー線”が日本で普及したのであるうか。

本邦で最初に脊髄を施行したのは、北川乙次郎であったが、北川の報告には“ヤコビー線”の名称は披見されない。同年の吉田頭三の報告にも、同様な線を穿刺の目安にしているが、何ら名称を与えていない。

その後の文献にもしばらくの間“ヤコビー線”の名称は見られず、初見するのは、明治四〇年に発表された木田栄

の「緒方病院に於ケルびーる氏脊髄麻酔法ノ実験」（東京医学会雑誌二二、七二四、明四〇）である。

しかしその後の文献には、Jacobyの他にJacobiとかJacobとがあって一定しなう。

わが国が範を採ったドイツでは全く“ヤコビー線”は知られていないことから、著者はヤコビーはあるいはアメリカの医師と考え、種々探索した結果、“ヤコビー線”の原典は、一八九五年十二月二十八日、翌一月四日に *New York Medical Journal* に発表された George W. Jacoby の “Lumbar puncture of subarachnoid space” であることが判明した。

この中で内科医のヤコビーは、両側腸骨櫛の最高点を結ぶ線は、第四腰椎体の中心を通るとし、これによって穿刺部位を決定するといふものであった。

このヤコビーの論文を日本のだれかが引用紹介し、以来“ヤコビー線”の名称が日本で普及したものであろう。

（弘前大学医学部麻酔科）